

同されるが然も本来少しく字形が異なるので、それぞれ字形に従つて一と二ではsと読み、三ではśと讀んだのであるが、三者ともに同一名を記したのであることは疑ありません。を、漢書西域傳を始め諸書に見える大夏の五翎侯の一つで、かの迦賦色迦王の本地である貴霜 *Kuei-suang* 即ち佛教との關係に於て有名な *Gandhāra* の境域、今の *Kabul* の谷間地方で昔 *Kušan* と呼んだ地名に當ると思はれると説き、東西の學界はこれに對して何等の異説となへるものもなく十餘年を経過しました。併し仔細に吟味するとこの論述にはそれ自體にある程度の矛盾もあり、また別にこの説を否定すべき證據も出て來たので、私はミュラー教授の所説に反對し、昭和五年（一九三〇年）に史學會の大會で「大月氏及び貴霜に就いて」と題して講演をした時にこの問題に論及し、更にその詳説を同年十二月、桑原博士還曆記念東洋史論叢に發表しました。その證據の要旨は、京都大學所藏のツルファン出土回鶻文摩尼教徒祈願文の斷簡の中に、*qamīl* 人某 *solmī* の人某、*kūšan* の人某と書き並べ、これらの人々の冥助をマニ神に祈願したものがありますが、その *qamīl* といふのは今の哈密 *Hamī* また *solmī* といふのは、今はその名を残してゐないが、元代に唆里迷といふ字面で元史に現はれてゐる地に相違なく、その位置は元代の別失八里 *Beš-balīq* に近いところで、今の迪化を去ること大して遠からぬ地と認められる。これら兩者と共に回鶻の摩尼教徒として記されてある *Kūšan* の人某の生地 *kūšan* は、前記ミュラー氏の解説した佛典の奥書に見える *kūšan* と同一であるが、これがこの地方から遠く離れたガンダーラ地方の *Kušan* の人であることは疑はしい。然らばこれをどこに當てればより適切に解し得るかといへば、自分は哈密や唆里迷と近接の地で、古く龜茲と呼んだ今の庫車（クチャ）、即ち十一世紀の *Mahmud al Kāšgari* の辭書にクチャの別名 *Kūšan* と記され、元史や親征録等に曲先 *k'ü-hsien*